

尾張徳川家による八雲の開拓

八雲地域は、1878（明治11）年から始まる旧尾張藩士族の集団移住によって本格的に開拓されました。これは、尾張徳川家第17代当主徳川慶勝が、明治維新によって失職し、生活に苦しむ旧家臣団を憂い、北海道開拓による土族の授産および国益に供する事業を目指してはじめました。

この開拓事業は、徳川家が150万坪（約4.96km²）の土地を無代価で払い下げを受けるかわりに、開拓使から移住者への扶助はなく、開拓にかかる費用は徳川家が負担するという、官費に依らない民間資本による北海道開拓の先例となりました。そして遊楽部に作られたのが徳川家開墾試験場で、七重勸業試験場から西洋農具の使用方法を学びながら開拓が行われました。当初水田稲作と養蚕を試みますが、気候風土が合わず断念し、馬鈴薯や豆類を主として育てました。

1888（明治21）年から土族以外に小作農の移住もはじめました。1912（明治45）年には土族移住人75戸に対して約924町歩（約9.16km²）の土地所有権の移転登記を完了させて自作農とし、土族授産は終了しました。その後は、土族以外の小作農と、残った農地や山林経営を行う徳川農場となりました。

徳川農場は、1927（昭和2）年の時点で、八雲農場・野田生農場・大野農場・ユウラップ農場と4カ所あり、面積は畑だけでなく市街地や山林なども含めると約5083町歩（約50.41km²）ありました。徳川農場は、単なる農場主と小作人という関係ではなく、農場主徳川義親の元、酪農への転換を支援し、土地改良など農事指導を積極的に行いました。また農民美術研究会の事務局を担当し、生活改善にも力を入れるなど、徳川農場に限らず町の発展に多大な貢献をしました。しかし第2次世界大戦後、農地解放により1948（昭和23）年に小作人に農地を渡し閉場してしまいます。しかし、農地以外の残った山林などを管理するために、八雲産業株式会社を立ち上げて事業を引き継ぎ、現在も町内で伐木及び植林、種苗事業を行っています。



1885(明治18)年頃の八雲 (現在の役場周辺)

徳川林政史研究所所蔵資料

【年表】(八雲地域)

- 約1万2千年前 上八雲地域に人が住み始める。
- 1596年頃(慶長年間) ユーラップ場所とノタオイ場所が開設される。
- 1764(宝暦14)年 津軽・南部から落部に漁業経営の最初の移住があった。
- 1772(安永元)年 このころ遊楽部鉱山で鉛・銀の採掘が行われる。
- 1857(安政4)年 大野藩(福井県)の家臣が鷲ノ巣(現在の立岩)を開墾。
- 1865(慶応元)年 落部で英国領事館員によるアイヌ人骨盗掘事件発生。
- 1871(明治4)年 ラコツナイ(現在の浜松)に斗南藩士が移住。
- 1873(明治6)年 山越内に教育所設置、教員は旧斗南藩士三井計次郎。
- 1878(明治11)年 徳川慶勝が遊楽部官有原野150万坪の無償払い下げを受け、旧尾張藩士族の集団移住がはじまる(のちの徳川農場)。
- 1880(明治13)年 サケの天然ふ化事業が遊楽部川で開始。
- 1881(明治14)年 遊楽部・黒岩が山越内村から分離し、山越郡八雲村となる。
- 1890(明治23)年 国道5号が開通する。
- 1897(明治30)年 川口式澱粉製造器が完成、澱粉製造の効率が高まる。
- 1903(明治36)年 鉄道が開通する。
- 1911(明治44)年 落部村にてボタンエビ漁がはじまる。
- 1919(大正8)年 町制施行により八雲町となる。澱粉価格の暴落が起きる。
- 1920(大正9)年 各地区に畜牛組合を組織し、翌年から有畜混合農業をはじめめる。馬鈴薯澱粉製造から酪農への転換点。
- 1924(大正13)年 伊藤政雄作の北海道第1号の木彫り熊が出品される。
- 1948(昭和23)年 農地解放により徳川農場が閉場する。
- 1957(昭和32)年 茅部郡落部村と合併する。
- 1966(昭和41)年 本格的にホタテの養殖に取り組み始める。
- 2005(平成17)年 爾志郡熊石町と合併し、新たに二海郡八雲町となる。
- 2006(平成18)年 道立公園噴火湾パノラマパークが開園、八雲ICが開設。
- 2009(平成21)年 落部ICが開設。



案内図

八雲町郷土資料館 YAKUMO Town Museum



1881(明治14)年築 開拓移住者の住居

開館時間 午前9時から午後4時30分
 休館日 月曜日、祝日、12月29日から1月5日
 入館料 無料
 住所 〒049-3112
 北海道二海郡八雲町末広町154番地
 電話 0137-63-3131(教育委員会代表番号)
 FAX 0137-64-3848(教育委員会代表番号)
 E-mail museum@town.yakumo.co.jp
 URL http://www.town.yakumo.lg.jp/modules/museum/index.php



郷土資料館は木彫り熊資料館と繋がっています。
 ←の建物が入り口です。
 隣接の梅村庭園も合わせてご覧ください。

自然

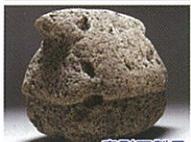


八雲町のなかでも八雲地域は、800m級以上の山々に囲まれ、そこから流れ出て段丘や扇状地を形成しながら内浦湾（噴火湾）に注ぐ河川によってできています。なかでも遊楽部川にはサケが約10万匹上り、産卵後のホツチャレを食べに国の天然記念物に指定されているオオワシ・オジロワシが多く飛来します。

考古



赤彩注口土器



家形石製品

八雲地域には遺跡が79件あります。特に縄文時代が多く、国指定重要文化財の骨角器等が出土したコタン温泉遺跡、道指定文化財の赤彩注口土器が出土した野田生1遺跡、全国で唯一縄文時代の住居を模した石製品が出土した栄浜1遺跡といった全国的にも有名な遺跡があります。

山越内会所



1800（寛政12）年、蝦夷地が松前藩から幕府直轄になったことから、蝦夷地経営のために会所という行政機関を各地に設けます。また山越にある境川を和人地と蝦夷地との境界としたため、亀田にあった関門を山越内会所へ移し、通行人改め業務も合わせて行う関所的な性格を持ちました。

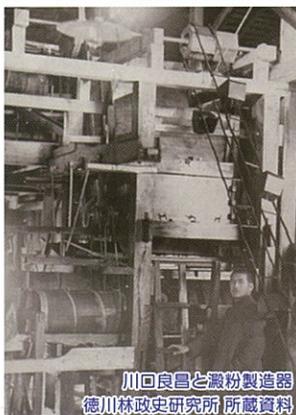
アイヌ



辨開着用カハラミツ

八雲地域においては落部アイヌと遊楽部アイヌが知られていますが、中でも落部アイヌのリーダー、辨開麻次郎が有名です。1900（明治33）年の東宮殿下（のちの大正天皇）ご婚儀には小熊2頭を献上して、「御所の松」を拝領しました。また、八甲田山雪中行軍の遭難者捜索に従事するなどしました。

馬鈴薯澱粉



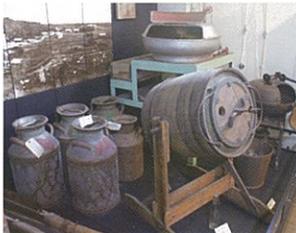
明治末から大正前半期には「八雲片栗粉」という馬鈴薯澱粉の製造・販売が盛んでした。最盛期には町内の総作付面積の約4割で馬鈴薯を栽培していました。

水車を動力とした馬鈴薯澱粉の製造法を川口良昌が改良し、組合を作って品質改良に努めた結果、全国一の高値で取引されました。

しかし第一次世界大戦後に価格が大暴落し、工場の多くが閉鎖、農地を捨てる農民も相次ぎました。

一方、1915（大正4）年から徳川農場事務所が設置した八雲馬鈴薯研究所では種子用馬鈴薯の栽培と品種改良に取り組んでいました。その結果を取り入れながら、大暴落後は澱粉用から種子馬鈴薯の生産へと転換していきました。

畜産・酪農



八雲においては、1878（明治11）年から移住者によって耕牛馬の飼養がはじまり、1881（明治14）年から牧牛舎を作って増産を図ります。1906（明治39）年から石川農場が牧牛に着手し、翌年から巻印バターを生産していきますが、牧牛を行うのは町内の一部篤志家のみでした。

しかし1919（大正8）年、澱粉価格が大暴落した後に残ったのは、地力を失った耕作放棄地でした。これを再生するため、各地区に畜牛組合を組織させて牛を導入し、フンを肥料として地力を取り戻す有畜混合農業をはじめます。牛乳を加工し販売するため全町を挙げて工場を誘致し、次第に飼育頭数が増えて酪農へ発展し、欧米に学んだ酪農先進地を形成していきます。現在では、放牧酪農や資源循環型畜産に取り組む酪農家・大学があります。

漁業



大漁のイワシ



サケの人工ふ化

内浦湾では明治以前からニシンが、大正期からイワシが多く捕れたので、加工して出荷していました。しかし昭和20年代には漁獲量が減り、加工場や漁師が減ります。そこで養殖を目指し、コンブやノリ・ワカメ、ホッキ等を試し、ホタテの養殖が適していることを探し当て、1966（昭和41）年頃から本格的にはじめて今日に至ります。

遊楽部川の鼻曲りのサケは近世には既に知られていました。1880（明治13）年には開拓使から委嘱されたサケの天然ふ化事業が、道内ではじめて遊楽部川にて開始されました。その後、上八雲にて人工ふ化事業を開始し、昭和期には国際的な調査が行われながら、現在もふ化・研究調査事業が続けられています。

鉱山



江戸時代初めに遊楽部鉛山として採掘が始められました。他に金や銀が産出したとの記録もあります。1862（文久2）年には、アメリカ人技師が火薬を使った西洋式の岩石を破碎する方法を日本で初めて指導しました。



坑道



選鉱場



索道

明治中ごろには短い期間だけ銀を採掘し、1918（大正7）年からはマンガンを中心として採掘をはじめます。1936（昭和11）年から、山から八雲駅付近までの索道（ゴンドラ）を整備します。マンガンは製鉄のための軍需品として、戦後も復興資材として需要がありましたが、鉱石輸入の自由化などが原因で1969（昭和44）年に閉山しました。